020232-000-8

特51-952

イエス我儕のために苦しむ

三浦　徹／編

M21

ABI-0035

イエス我儕のために苦しむ

所は判然と分らねど艮藏と云ふ人あり若き頃より酒を
ひだん〳〵癖となりて今は甚しき強酒にて妻と二人の女あ
しが其衣食にもかまはず旦暮酒浸になりて日を送れり妻は
之を愛て屢意見をしたれども艮藏は少しもとり用ゐず怒りく
るひて果は打叩き器財を踏潰し打破しますく荒まはれば遂
に妻は之を苦にやみて長き病にうちふしたり然し艮藏は妻の
病にもかまはず酒びたしになり居たれば病はいよく重くも
はや此世の望も斷たれば女の孝を枕邊に招び近け細々と遺
言を爲し汝はながく此家にありて父上の機嫌よきときにはし
つかに意見を加へ何卒して父上が酒を廢め玉ふやう骨折り父
上が無理非道のことを爲し玉ふも決して父上を恨まず又つら
きことありても父上のためなれゝ出奔などすることなく父上

の心の敗る日を氣長く待ち呉よと云ひ置きて永き眠につきたり お孝の愁傷大かたならず 父にすゝめて野邊送を濟せしが父の酒癖はいまだ罷まず打擲などすることは母の世にいませしときよりも甚しく腹立てお孝を戸外にれし出して臥す夜などもたびゝありたり或る冬の夜雪まじりの雨ふるときお孝は乃翁を愛すれば此家を去るに忍びずと裏藏の之を聞て近邊の人三四人裏藏の家の前を通りかゝりしに何か黒きものゝ戸の前にあり近よりて見れば女のお孝が濡しほれて雨滴落に臥し居たり引起して仔細を問ふに又も裏藏が酒の上でうち腹たち戸外に追ひ出して臥したり毎夜遅く歸ね疾く起き終日父のために勞きたれば疲れて我知らず此所に眠りしなりと不覺しばに語りて人々の心切を謝したり其時一人のもの氣のどくに思ひ濡たまゝ居るは躰のためにもよからず寒さもさこそと思ひやらるれば兎もかくも我家に來りて此夜を明し明朝父の酒

のさめたる頃詫して家に還し遣すべしと云ひたるにお孝は首をふり「其思召はありがたけれど皆樣のご厄介にならば尚ゝ父の怒を引起すなるべしたびゝのことなれば樣子はよく知りたり父の眠りし頃に入りて眠らんとて受引かざれば近所の人々も強てはすゝめず立去りたり是の如くお孝は父に苦しめられ外に立て明す夜も多かりしが少も父を恨まず却てよく父に事へたり斯く父に孝行なるは世にたびゝあることにあらず一日父は朝疾く起て厨にいたりしにお孝は父の食物をこしらへ居たり父はお孝の優しく已に事へるを悦びしか又はお孝の家にあるを五月蠅く思ひしかお孝に云ふやう汝は何故我家にありて去らざるやと問ひしにお孝は回顧りて乃翁は妾の父なり妾は乃翁を愛すれば此家を去るに忍びずと裏藏の之を聞て「汝は我を愛するや」と兩三回問ひかへして又云ふやう我は日夜

酒浸りになりて世間の人には賤められ爪弾せぬものはなき程
なるに夫でも汝は我を愛するやと云はれてお孝や眼中に涙を
うかべ乃爺れ之を知り玉はざるべし母人が死し玉ふとき妾に
遺言して乃爺によく事へよ家を去る勿れと教へ玉ひしが乃者
妾の夢に母人が來玉ひてお孝や汝は父の家を去ることなく父
に勤めて強酒を慶めさせ汝の家の幸福を祈るべし若し父上が
心を改めて酒を廢め玉はゞ汝の幸福いかばかりぞやと云玉ふ
かと思へば夢覺めはべり然ば妾は母人の戒しめを守り乃爺を
愛するにより此苦しき世界を忍び苦き世を送れりと云れて
眞藏は大に驚き嗚呼我過ぬ我過ぬかく迄汝の我を愛するを知
らず日々夜々酒に浸され汝を苦しめ我儘氣儘に暮し居たるは
我ながら愚なりしと後悔の涙にくれ小兒の如く大聲をたてゝ
泣臥せしが是より心を改めて酒を廢め女の心を悦ばせ世間の

人に譏られて尚幸福の世と送りしとかや偖イエスキリストは
此世に下り人と爲り我儕人類の罪を贖んために苦しき世を送
りユダヤ人に責られ悪まれ追出され打擲され愚弄され嘲られ
玉ひしが人のために受玉ふくるしみなれば少しも之を厭ひ玉
はず飽まで謙りて艱難困苦を忍び玉へりされど其苦を受て世
より遁れ玉はず懇に人々を諭し玉ひしは我儕にとりては難有
忝きことなり人々よ此眞藏が女の爲めに苦しみたるに感じ
て其悪癖を改めたる如く諸君もイエスの仁愛を苦しみとに感
じて速に悪癖を去りイエスの恩を永く蒙りたきものなり

明治廿一年五月　五日印刷
明治廿一年五月十五日出版

編輯者兼發行者　三浦徹
東京日本橋區蠣殻町一丁目四番地寄留

印刷者　廣瀬安七
東京日本橋區兜町一番地

製紙分社